

サトリの
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗妙昌寺住職
村井惇匡さん

第45回

私は滋賀県の一般家庭で生まれ育ちました。父は大工の棟梁。大金を手にして遊び暮らしていましたが、そのうち借金を重ねるようになり、私が中学生のころには、サラ金の取り立てが自宅に来るまでになりました。終わりの見えない借金生活。私は父親を殺すか、自分が死ぬか、とまで思い詰めました。そんなある日、母親に隣町の日蓮宗の寺に連れて行かれました。その寺の尼僧は私の顔をじつと見て涙を流しました。「つらいね、悲しいね」と。誰のことも信じられず、憎しみだけを抱えて生きてい

た私は、「自分の苦しみを理解してもらえた。この人についていこう」と決めました。その尼僧を追いかけ、追いつきたくて、気がつけば私はお坊さんになっていました。

**電気も水道もない貧しい村に
中学校と小学校を建設**

11年前、縁あって埼玉県東松山市の妙昌寺の住職となった私は、托鉢を始めました。長く続けていくと、托鉢の浄財や寺の賽銭がずいぶん貯まりました。「何か人に喜んでもらえるお金の使い道はないだろうか」と考えていたとき、知人がNPO法人を立ち上げて、アジアの貧しい地域に学校を作る支援活動を始めたと知りました。

妻に相談すると、「それがいい!」。こうして2010年、カンボジアのカンボット県チューティオ村に妙昌寺中学校を建てさせていただきました。そして今年3月には2校目となる妙昌寺小学校も完成。開校式に出席し、子どもたちの輝く笑顔に開かれました。

これらの活動の根底にあるのは、大学時代の恩師の言葉です。「私

に恩返しはしなくていい。あなたが返すべき人に返しなさい」。だからカンボジアの子どもたちには、私に何かを返してほしいとは思いません。「あなたがやれることをやってくれればいい」と思っています。「生まれてきてよかった」「生きていてよかった……そう思ってもらえることが私の願いであり、仏様の教えであると信じています。

**子どものための行事を通じて
仏教に触れ合う場を提供**

妙昌寺の神様は鬼子母神、つまり子どもの神様。また私自身、4人の子を持つ父親でもあることから、当寺では子どもを中心とした取り組みを行うこととしました。

8年前から毎年夏に「夏休み子ども道場」を開催。遊びの要素を入れつつ、1泊2日の修行体験を行っています。子どもたちには、食事や生活のマナーについて厳しく指導したりしますが、最初は緊張していても、次第にどの子も目が輝き、イキイキとした生命力を感じさせてくれます。その輝きが未来への明るい光と感ずるのです。

「生まれてきてよかった」と
子どもが思える未来のために

むらい・じゅんきょう 1968年生まれ、滋賀県出身。立正大学仏教学部卒業後、1992年に日蓮宗信行道場を修了し、日蓮宗教師資格を取得。2003年、埼玉県東松山市の妙昌寺の42代住職となる。海外で支援活動を行うNPO法人と協力、資金提供して、2010年、カンボジアに中学校を建設。2014年には小学校も建設した。毎年夏に「妙昌寺夏休み子ども道場」を開催している。



上／カンボジアに建設した小学校。小規模ながらもコンクリート造の立派な校舎。中／現地での開校式に出席。下／毎年行われる「夏休み子ども道場」は今年で9回目を迎える。

